



～読んで、感じて、伝えよう！～

2022 年度

入賞者作品集

2022 年度
読書推進プログラム
～読んで、感じて、伝えよう！～
入賞者作品集

もくじ

受賞者一覧	1
館長講評	2
受賞作品	
〔一等〕	
ある大学生の語学	
須崎 ネオ (日本語・日本語教育学科3年)	4
〔二等〕	
今後のエネルギー問題について考えるー福島第一原発事故を通して	
田中 優磨 (心理カウンセリング学科3年)	8
きっかけは何だった。	
相田 百花 (児童教育学科3年)	11
〔佳作〕	
大学生とは	
鈴木 陵人 (心理カウンセリング学科3年)	15
本当の友だちとは	
山元 日和 (児童教育学科3年)	19
〔審査員特別賞〕	
戦争が終わる日	
小野寺 彩音 (児童教育学科3年)	22
「感謝」の気持ちを伝えること	
前里 莉音 (韓国語学科3年)	25

作品は原文のまま掲載しています

受賞者一覧

【一等】

須崎 ネオ (日本語・日本語教育学科3年)

【二等】

田中 優磨 (心理カウンセリング学科3年)

相田 百花 (児童教育学科3年)

【佳作】

鈴木 陵人 (心理カウンセリング学科3年)

山元 日和 (児童教育学科3年)

【審査員特別賞】

小野寺 彩音 (児童教育学科3年)

前里 莉音 (韓国語学科3年)

【参加賞】

9名

館長講評

今や本学図書館の恒例行事となった読書推進プログラムは、毎年年末にかけて全学生諸君を対象として開催される重要なイベントである。本年はコロナ禍明けという社会的な事情もあり、例年と比較して応募者総数が少なかったにもかかわらず、その分、すべての参加作品の完成度が格段に向上しており、これをもって当イベントの定着とともに本学学生諸君の学力レベルの向上を期待させる結果となった。

特に、図書委員会メンバーの全員が審査員となり、参加者名を伏した上で採点した得点集計において、上位5得点の中に5人の作品がひしめく大混戦となり、よって、いずれの入選者も僅差で順位が決定したことを明記しておく。

たとえば、自己の語学への思いを情熱的に語る作品であった『ある大学生の語学』は最高得点の第1位ではあったが、これに続く原発問題や性同一性障害という優れて現代的な社会問題にそれぞれ取り組む作品であった第2位の『今後のエネルギー問題について考える』および『きっかけはなんだって良い』は同点同順位であり、両者とも1位との差はほんのわずかであった。また、さらに佳作の2名、すなわち、大学生である自己の自律と友人関係への思いという極めて内面的な問題へ取り組む作品であった『大学生とは』および『本当の友だちとは』の2人と2位の2人との差もわずかな得点差であった。

なお、以上の上位順位者たる5名には及ばぬ得点なれども、平和な時代における戦争への意識に関する作品であった『戦争が終わる日』および日本人の謙遜文化に関する作品であった『感謝の気持ちを伝えること』の2名をそれぞれ意欲的かつ個性的な作品として評価し、これを審査員特別賞として選定した。

ここに、以上7名の優良なる作品を応募してくれた入選者諸君の快挙を讃えるとともに、今後も当イベントが引き続き盛況となることを願う。

新宿図書館長 石井貫太郎

社会学部地域社会学科教授

法学博士

一等

ある大学生の語学

日本語・日本語教育学科3年

須崎ネオ

『ぼくたちの外国語学部』三修社

黒田龍之助著

この本を手にとったのは、大学1年の秋ごろだった。日本語に興味があって日本語学科に入学した私は、そのころには日本語に限らず、言葉というものの自体にも惹かれ始めており、言語学・語学の書籍を読み漁っていた。

そこに描かれていたのは、語学を真剣に楽しんだ5人の大学生と、1人の語学教師であった。著者の黒田龍之助はロシア語教師・言語学者で、「複数の言語を学ぶ人を対象にした言語学」をテーマにさまざまな本を書いている。この本では、言語学の授業を担当する非常勤講師という立場だ。学生は、インドネシア語専攻で旅行好きのすぎくん、ドイツ語専攻だが英語教師を目指すクワくん、ハンガリー語専攻で快活なウメくん、著者の仕事場にポーランド語の翻訳をしに通うフジくん、そして私と同じ日本語専攻で、音楽やスポーツなどさまざまな方面で才能を発揮するサクラくんである。

彼らは著者の言語学の授業で知り合い、語学同好の士として意気投合、やがて飲み会や旅行などを頻繁にするまでの仲になる。著者はそれを「裏ゼミ」と呼んだ。本書は、裏ゼミの活動を通して、外国語学部のあり方、語学との向き合い方、延いては外国語というものの自体をとらえなおす本である。

ここからは、彼ら裏ゼミの学生たちを手本にした、私の大学生活2年半における語学体験を綴る。著者が多く手掛けている、「語学エッセイ」なるジャンルへの接近を試みたため、読書感想文としてはいささか脱線が多くなることをご容赦いただきたい。

私の大学生活は、2年の秋学期から始まったといっても過言ではない。入学当

初から新型コロナウイルスによるオンライン授業が続き、想像していたものとは全く違う大学生活を送っていた。本を読んでいたならば家に籠ることも苦ではないが、特筆すべき出来事が起こらなかったのは事実である。

私が初めて対面で取った外国語の授業は、2年秋のフランス語とスペイン語である。黒田氏の他著書『語学はやり直せる！』(2008) p.203に「複数の外国語を、いっぺんに始めないことだ」と書かれている通り、文法や語彙が似通っているこの2言語を同時に始めると混乱するおそれがある。しかし、どちらも面白そうだったのだからしかたがないし、理由を付けてチャンスを逃したくはなかった。実際、この選択は正しかったと思う。

ふだんは決して成績優秀ではない私でも、好きな語学ともなればやる気も湧くもので、両方ともS判定を取れた。スペイン語の先生は、私が動詞の活用や数字をすぐ覚えたことに驚いて私を天才扱いしたが、単に独習の経験があっただけだから当たり前である。「語学に天才はいない」というのは、著者の持論でもある。

3年になると同期は就活を始めたが、私は相変わらず語学にのめりこんでいた。スペイン語IIは私含め受講者が3人しかいなかったが、学ぶ側には好都合だ。おかげでたくさん質問ができて、先生の専門であるメキシコ文化についても少し学べた。

フランス語はIIを飛ばし、目白大学学長でもあるT先生担当のIIIを取った。先生の主催する「フランス文化研究会」に入れば、フランス語をより深く学べると思ったからだ。

研究会にはすでに何人かが在籍していたが、2年ぶりの対面授業ということもあり、3年生は私だけだった。T先生の研究室で過ごす昼休みは、とても知的好奇心を刺激されて、授業そのものより有意義なほどだった。また、ありがたいことに、フランスの建築様式を取り入れた迎賓館赤坂離宮と、国立西洋美術館に連れて行っていただいた。先日の学祭では、そこで撮った写真とフランス語関連資料の展示を行った。T先生の教え子さんもたくさんいらして、終わったあとは彼らも交えてイタリア料理店でご馳走になった。私はまさに裏ゼミの気分であっ

た。

そして、現在はインドネシア語と韓国語を受講し、スペイン語教室にも通っている。いずれの先生もネイティブだから、私はできるだけその言語で話すようにしている。もちろん初級レベルで私が作れる文など知れているが、それでも母語話者に通じた瞬間はとても嬉しいものだ。

p.239 から展開される、外国語学部生への三つのアドバイスについても自省してみる。

一つは、専攻語と英語以外にも言語を二つ以上は学ぶべきということ。専攻語を似て非なる視点から見るための同系語と、なんらかの有力語を学ぶことを推奨している。私の場合、琉球諸語とスペイン語あたりになる。しかし、英語を必ず学ぶべきという主張には一考の余地がある。多くの言語に影響を及ぼし、膨大な文献を抱える英語ではあるが、そのみを理由に学ぶのでは実用主義的で、語学を楽しむことと反するからだ。

二つ目に、留学が絶対ではないこと。インドア派の私は、言語と文化を学ぶことそれ自体に楽しさを見出しており、映画やドラマのセリフが分かるようになれば嬉しい、という程度の動機で語学をやっている。留学すれば多様な経験が得られるとは分かっているが、語学のためにするつもりは起きない。最大のデメリットとして挙げられている「本が読めないこと」についても、よくわかる。

三つ目は、言語理論に深入りしないことである。語学力を身に付ける前から言語理論を研究しても説得力がないと、著者は主張する。私は、語学に必要なだけの言語学の知識はすでにあると自負しているから、現時点でこれ以上学ぶ気にはならない。

私は、著者が期待する外国語学部生とかけ離れてはいないだろう。しかし、けっして活動的な人間ともいえない。この間など、スペイン語話者と話せる機会があったにも関わらず、話しかける勇気が出なくて落胆したほどだ。それでも、裏ゼミの5人のように、自分から動いて素晴らしい師に言語を教わりたいからこそ、さまざまな授業を取って先生に話しかけたのである。

ここまで語ってきたように、私は大学生活において、広く浅く語学に手を出し

てきた。そのせいで、どの言語も未だ初級止まりだが、後悔はしていない。以下の言葉が念頭にあったからである。

「いつでも積極的に外国語に取り組むウメくん。しかも専攻語のドイツ語だけでなく、いろんな言語に挑戦し続ける。わたしはこれを好ましいことだと考えている。狭い専攻語に囚われることなく、いろんな外国語を学習しながら、自分の言語観、延いては世界観を養っていくのは、外国語学部生として理想である。せっかくいろんな言語科目が開講されているのだから、いろいろとチャレンジしてみるといい。」(p.114)

本書をバイブルとして取り組んだ言語学習は非常に楽しく、まさにこの言葉の通り、自らの言語観・世界観が広がったと感じる。これこそ語学の醍醐味だ。私はこれからも、裏ゼミ生たちのように、そして著者のように、語学を楽しみたい。

二等

今後のエネルギー問題について考える —福島第一原発事故を通して

心理カウンセリング学科3年

田中優磨

『福島第一原発 真相と展望』集英社

アーニー・ガンダーセン著 岡崎玲子訳

東日本大震災及び福島第一原子力発電所における事故は、既に11年の時が流れているが、多くの人にとってまだ記憶に新しいものと思われる。私は当時9歳であったが、未だに当時の状況をよく覚えており、10年以上も前のことであるように感じられない。その日は金曜日で、小学校の授業も終わり、さあ帰ろうという瞬間に強い揺れを感じた。そのあとのことはとても一瞬のように感じ、気づけば両親が迎えに来て、家に着いていた。帰り道の信号が停電し、警察官が手信号を行っていて、その非日常性にドキドキしていた。テレビをつければ津波の映像が流れ、次の日には原子力発電所の爆発の映像も流れていた。小学2年生の時に中沢啓二の『はだしのゲン』を何周も読んでいたため、原子力や放射線の怖さというものを何となく知っており、子供ながらに「大変なことになってしまった」という事は理解していた。しかし、「大変なことになってしまった」ことはわかっても、具体的にどのように大変なのかは理解しておらず、理解も難しいだろうとその実態を知るといふ事はその後なかった。

それから10年以上経ち、現在ではニュースなどがある程度見るようになり、昨今のエネルギー、特に電力に関する問題・話題が多く取り上げられることを感じる。「持続可能な社会の実現のため」「脱炭素社会を目指す」「再生可能エネルギー」「電力供給のひっ迫」など、その幅は実に広がっている。その中でも、特に大きく話題に上がることが度々ある問題が、原子力発電所の是非について

であると感じる。

原子力は、炭素を排出することなく、少しの燃料で莫大なエネルギーを取り出すことができることから、一般に供給する電力としてだけでなく、軍事的な目的としても、燃料補給をするために港などに停泊する手間がなくなるという事などから、航空母艦や潜水艦などに原子炉が搭載され、長時間の行動を可能とするようになっている。その反面、炭素以上に大きな影響を及ぼす放射線を排出するという事もあり、その危険性から、原子力発電をやめるべきであるというような意見も多くある。ここまでは普段のニュースからでもわかることである。

当然のことではあるが、現在のニュースを見ても、現在のことにに関するニュースしか入ってくることはない。福島第一原発事故が発生した当時の状況というものの方が実際はどうだったのか、それを知らない。そのような時、今回の本を見つけた。福島第一原発の真相がわかるという事に飛びついた。

今回、この本を読んで感じたことを簡潔に言うならば、「事故は起こるべくして起こるものだな」という事である。原子力発電所の安全管理は、資金よりも大事なものであるだろうと思うが、それとは全く逆であったという風を感じざるを得ない。

この本を読んで、福島第一原発事故の原因は主に以下の2つであると感じる。
1つは、古い原発の長期運用である。筆者によれば、

原子力業界では安全基準に遑及効が働かないのです。奇妙な話ですが、よくある現実です。たとえば、自動車を例にとって考えてみましょう。1960年代の車はブレーキライトが1つしか付いてないかもしれません。しかし当時の認可を受けているため、走らせることができます。1970年代以降の車にはブレーキライトが2つ必要です。60年代のモデルには求められなかったからといって言い訳にはなりません。技術が進化しても、昔の基準を満たしていれば運用を続けられることがあるのです。

と言っている。この話は原子力業界に限らず、安全を求めなければならない際

には、昔に認可されたものも今の基準にアップデートすべきではないだろうか。実際、「事故の直接の引き金となった 2 つの要因は容易に調整できました。(中略)出費を惜しんだだけです。」という。

もう 1 つの原因は非常用のディーゼル発電機の配置である。「各号機に 2 つずつ備え付けられていた非常用ディーゼル発電機は、海に近い地下階に並んでいました。(中略)安全であるためには、ディーゼル発電機は海側ではなく、陸側の高い位置に、それぞれ異なる高さで置かれなければなりません。リスクを分散し、一方がやられても片方が生き残るようにするわけです。」とある。この理由について筆者は、「丘の上へ移動し、配管や配線でつなぐだけです。建物は耐震性の基準をクリアしなければなりません、それでも 80 億円ほどで解決できた問題です。」としており、この資金を渋ったことで外部電源を喪失、メルトダウンといった結果となった。

これら二つの原因の元は、資金の出し渋りである。安全性を引き換えにしてよいものであるのか、考えるまでもなくわかりそうなものだと感じてしまった。

今回、この本を読むまでは、原発に関して賛成派か反対派かについては決めかねていた。しかし、読み終わってみると、原発はなくすべきであるという気持ちがとても強くなった。

日本は地震大国であり、今後このような原発事故はいくらでもあり得ると考えられる。どんなに原発に関する安全基準を高め、それを実現しようとも、自然は人の予想をはるかに超えてくるであろうし、そもそもその資金を出し渋るようであるなら、原発の利用など絶対に行うべきではない。

ところで、日本は再生可能エネルギーに関しては多くの資源を有しているのではないかと感じる。筆者も、「日本が恵まれている風力、太陽光、潮力、地熱といった代替エネルギーを活かす時代です。」としている。特に日本は島国であるため、潮力発電がいちばん大きく期待できるのではないかと考えられる。大きな危険性をはらみ、いつ崩れるかわからない安全性にすら資金を出し渋るのであれば、いっその危険性がなくなるものへと転換し、そこへ費用を出す方がとても効率的ではないだろうか。

二等

きっかけは何だったっていい。

児童教育学科3年

相田百花

『子どもの性同一性障害に向き合う 成長を見守り支えるための本』日東書院

西野明樹著

子どもたちに、安心して暖かい居場所を与えたい。子どもたちの個性をのびのびと過ごせる環境をつくりたい。このような考えになったのは、私が中学生の頃だった。将来のことを踏まえながら進路を決めなければならなかった時だ。きっかけは、私が小学生のときに感じた、担任の理不尽な言動。小学生ながらに最前やその空気感を感じ取り肩身狭く過ごしていた時期だった。それでも、私の持ち前の明るさと誰に対しても壁を感じない性格で友達には恵まれていた。“先生、嫌だなあ”と書いていても、友達と会える喜びや遊べる楽しさから学校にも行けていた。ただ、私のように誰もがポジティブに過ごせるわけでもないし、これからの子どもたちには私のような苦しい思いをして欲しくないと思った。そこで、大嫌いだっただ学校の先生になろうと決めた。学校の先生になるからには、前述の通り児童には誰一人として苦しい思いをして欲しくないし、笑顔でいられる居場所を与えたいと思った。そのためには一人一人への理解や配慮が必要であると考えた。近年では、勉強に少し遅れが出ている児童や ADHD などの認知も広まり、学級に1人～数人ほどいることが多いので先生方も気にかけてたり支援を行ったりしていると思う。しかし、他の面ではどうだろうかと考えた時、性同一性障害という文字が目に入った。そしてこの本を手にとったわけである。

性同一性障害の当事者である、筆者の西野明樹さんは「率直にいうと、私は自分の性別が『わからない』」と述べている。このことについて本人は男性として生きているが身体や戸籍など女性的な部分もあるので性別がはっきりしていな

いと示している。成人している当事者でも自身の性別が分からないとなれば、小学生の子どもたちにとってはより分からないものであると感じる。また、性同一性障害を持っている児童、さらにそれを自覚している児童は各学級にいるかといわれたら ADHD や勉強面で遅れがある児童よりも圧倒的に少ないだろう。そして身体的性別と心の性別に違和感を覚えてしまった場合、ショックを受けたり、周りの目を気にしてしまったりとのびのびとした学校生活を送ることは難しいと思う。なかでも私が一番気になるのが、そのことに対する周りの理解がなかった時だ。それが親だとさらに辛いものになるだろう。理解されないということはその児童自身を否定することにもつながると思う。そのようなことが起きないように私たち大人には理解する姿勢が大切であると感じる。それが児童にとって何か支えになるものになったらよいだろう。

では、性同一性障害の児童に対して学校側が支援を行おうとする。しかしこれはとても簡単なことではない。「学校側の先回りした対応によって、当事者の内面的機微が置き去りにされてしまったように思われます。」とあるように、心も身体も成長段階である児童に対して無理に状態を聞き出そうとして性同一性障害を自覚させるような言動をする必要はないと思う。学校側からすると児童にとって良い行いをしていると勘違いしている可能性が高いと感じた。児童が求めていること、考えていることよりもはるか先を想像し焦って対処しようとしているのではないかと思った。児童の気持ちを最優先で対処するべきであると思う。そのためには児童を理解する準備をこちら側がしていれば良いと考えた。これは知識を身に付けることもそうだが、それだけではない。むしろ、一人一人性に対する感じ方や価値観が違うわけで、周りにしてほしいこと、聞いてほしいことも異なると思うので知識だけでは対応できない。私は性同一性障害に向き合うのではなく、性同一性障害を知っているうえでその子自身と向き合うことが大切であると思った。向き合うためには知らないことを減らすために知識をつけておくべきだと考えている。

最初はその子どもにとって一番話しやすい人が話を聞いてあげてください。一

度誰かに話すことができ、それがうまくいけば、徐々にほかの人にも話せるようになるかもしれません。一番大切なのは、お子さんが安心して心を開けるかどうかといえるでしょう。

この文章を読んだとき、今まで自分が担任だから、自分が解決しなければと思っていたが、その児童にとって先生だから話せる、先生には話せないという境界があることに気づいた。それは親に対してもそうであると思う。その児童にとって1番話しやすく、心が許せる人と協力してその児童を支えることが大切であると思った。

大人側が同性だとか異性だとかにこだわるのをやめ、子どもが自分の居場所や役割を実感できる機会をなるべく多く持てるように努めてほしいと思います。普段の会話や発言のなかから、“男子/女子同士で”“男女でペアになって”のような言葉をひとつでもふたつでも減らせるようにする。

この文章を読み、確かに“男女でペアになって”と男子と女子の関わりを増やそうとするのが、お互いの性別を意識し始めた小学校高学年であると思う。男女の括りではなく、その児童の役割や居場所を与えられるような指導をしたいと思った。

この本を読むまで私は性別を“男性”、“女性”と2つに分けて考えていた。性同一性障害ときいたら、男性でないから女性として生きている、女性でないから男性として生きているという風に身体的性別とは異なっていると捉えていたが、性別には“男性”、“女性”のどちらかではなく、様々な性があり性別に囚われないことが大切であると思った。また、私はそれらを踏まえたうえで児童にその時その時に必要な支援をしたい。宿泊行事や水泳の授業など特に性別違和感や性同一性障害を抱える児童にとって困難な場面では、できる支援を教師から提案するとともに何か他に案がないか、要望はないかと児童と一緒に児童にとってより良い配慮ができるようにしていきたい。また、そのことを周りに説明するのか、

するならばどのように、どこまで説明するのか、など社会に出てもそれが自分でできるよう土台をつくってあげたい。そして医療機関など専門家にも頼って、児童と歩幅を合わせてともに歩んでいきたいと思う。

正直、性同一性障害や性別違和感について全てがわかったわけではない。ただ、それでいいのだと思う。一人一人考え方や感じ方が違うわけであって、性別に対する感じ方も違うものであると思う。自身の性別に対して、違和感を覚えたり悩んでいる児童にとって“理解したい、先生はあなたのためにできることがしたい”という気持ちが伝わり、寄り添いながら少しでもその児童が安心してのびのびと過ごせる環境や居場所をつくってあげることができたらいいなと思った。今はそれ行方、私の準備期間である。きっかけは何だっていい。自分が感じないこと、経験できないことを知る機会を増やすことが大切であると思う。この本を手にして私の価値観がまた広がった。

佳作

大学生とは

心理カウンセリング学科3年

鈴木陵人

『砂漠』 実業之日本社

伊坂幸太郎著

「大学生活は人生の夏休みだからね。」「学生でも20歳を超えたら大人の仲間入りだよ。」大学のことを大人に話すと、誰もが1度は言われる言葉だと思っています。確かに自由な時間は多いと思います。それでも、毎日のように課題が出て、就職活動が始まって、人生の「夏休み」とは夏休み最終日の、時間に「追われる感覚」を味わい続けるからなのではないだろうか、「20歳を超えたら大人」と急に責任を持たされても何も分からないと、この言葉を聞くたびに考えてしまいます。私もほとんど学校に通えないまま、気がついたら3年生になり、大学生らしいこととは何かを分からないまま、社会人として、働かなければいけない日が来るのだらうと嫌な気持ちを抱いてしまいます。

そんな答えのない悩みを持っている中、私は伊坂幸太郎さんの『砂漠』に出会いました。伊坂幸太郎さんは誰もがぶつかる大きな壁「社会」をからからに乾いた厳しい環境の「砂漠」と例え、「砂漠」に向かいながら毎日を個性豊かに過ごす学生たちの物語を書いています。私は日頃から本を読むことはありませんが、私の持つ「大学生とは何か」「社会に出ることへの不安」という漠然とした悩みを解決するヒントになるのではないかと思い、『砂漠』を手に取りました。

読み進める中で、この『砂漠』には大きな2つの特徴があると感じました。

1つ目は個性の強い登場人物です。主人公を含む5人の仲間を中心として物語が進んでいきますが、麻雀を通して繋がり始めるという変わった関係性から始まります。自分を信じてひたすらに突き進む子や、控えめな子、俯瞰的で大人っぽい子など、読んでいて飽きない人物ばかりでした。また、1冊の中で、5人そ

れぞれにフォーカスした場面があることも印象的でした。個性の違う人たちがどのような学生生活を送っているのかを知ることができるため、いろいろな視点からの「大学生」を見ることができました。

個性の強い5人それぞれの生き方からは、自由に自分らしく生きていいというメッセージを受け取りました。

2つ目の特徴は「春・夏・秋・冬・春」の4つの季節、5つの時間軸に分けられて物語が展開する点です。各季節で過ごす登場人物の物語に、自分の持つ季節のイメージ・雰囲気を重ねることで、より強い没入感を得ることができました。また、『砂漠』については、この季節ごとにテーマがあるように感じました。1回目の春は「出会いと挑戦」。夏は「挫折と後悔」。秋は「学園祭と大人の生きる世界」。冬は「リベンジ」。そして2回目の春は「別れと未来」。時間を細かく分けることで、大学生がいかにか自由で多くの経験を得ているのかを実感することができ、先に述べた、「人生の「夏休み」とは夏休み最終日の、時間に「追われる感覚」を味わい続けることができるからなのではないだろうか」という小さな問いの答えを見つけられたように思いました。大学生は選択できる時間があり、やりたいことにすぐに挑戦できるという自由さが魅力で、それはまさに最高の「夏休み」だと感じました。

また、「20歳を超えたら大人」と責任を持たされても何も分からないことについても、主人公の北村がヒントを与えてくれました。

確かに、生きていくのは、計算やチェックポイントの確認じゃなくて、悶えて、「分かんねえよ、どうなってんだよ」と髪の毛をくしゃくしゃやりながら、進んでいくことなのかもしれない。

今の大人たちも、急に広い「砂漠」に放り出されて、何も分からないなかで自由にやれと言われながら、なんとか生きてきたのだと理解しました。これらのことから、「大学生とは何か」という問いに対して、自由な「社会」という「砂漠」に対して、私たちも自由に準備していく期間なのではないかと解釈しました。

話は変わり、私の周りはアルバイトと就職活動を両立しながら「砂漠」という厳しい環境に向けて準備を進めています。いくら人それぞれの自由があると言っても、アルバイトも就職活動もろくにしないでのんびりとしている私にとっては焦らずにはられない環境です。口では何とかなると言いつつも、内心ではどうしようかと悩む日々。「大学生とは何か」とう問いの答えを見つけ始めたかと思うと、次は「社会に出ることへの不安」が募りました。どこまでいっても「社会」という「砂漠」が私の前に現れ続けます。この悩みに対して主人公の友達であり、常に自分の道を信じて突き進む西嶋という人物が興味深いことを発言していました。

みんなが俺をつかまえてね、将来のことを考えろ、って詰め寄ってくるんですよ。俺の学生生活はまだ残っているというのにね、何をそんなに急ぎ立っているのか、俺にはさっぱりですよ

俺にとっては黄金時代は今ですからね。この今しかないんですよ。過去のこととか先のことはどうしても良くてね、今、できることをやるんですよ。

準備が早い越したことはないと分かっているけど行動に起こせない私にとって、焦らなくても大丈夫、社会人にはできないのんびりとした、今しかない時間を大切にしたいというメッセージに感じました。

子どもと大人に挟まれながら葛藤する大学生活。自分を知り、社会を目指す大学生活。いつかは終わる大学生活。悩みは尽きないこの時期に『砂漠』に出会えたことは、自分自身を見つめ直す、良い経験になりました。未来のことなどどうせみんな分からず、正解のない問題なら悩むだけ無駄だと、悩む時間があるなら今の学生生活を、この主人公たちのように楽しんでみよう思うことができました。

西嶋は「その気になればね、砂漠に雪を降らすことだって、余裕でできるんですよ」と話しています。また、卒業式にて、学長は

学生時代を思い出して、懐かしがるのは構わないが、あの時は良かったな、オアシスだったな、と逃げるようなことは絶対に考えるな。そういう人生を送るなよ

と、卒業生に言葉を送っています。

からからで厳しい「砂漠」でも自分の力を信じて、雪を降らしオアシスを作ること、常に「今」を1番に考え、後悔の無い生き方がしたいと強く思えるそんな作品に出会えたことを嬉しく思います。

引用元

伊坂 幸太郎(2010). 砂漠 実業之日本社

佳作

本当の友だちとは

児童教育学科3年

山元日和

『きみの友だち』新潮社

重松清著

情報化が進み、遠くに住んでいる友人だけでなく一度も会ったことのない人も「友達」と呼ぶことができる時代になった。それが当たり前の毎日を過ごしている中で偶然「きみの友だち」というタイトルを見つけ妙に惹かれた。本を開く前にタイトルから内容を想像してみようと思った。主人公には友達が沢山いて、冒険をしたり思い出を作ったりするありきたりな物語なのではないかと考えていた。しかし読み進めると、子どもの生活の中心である学校を舞台に、クラスメイトとの関係や幼馴染との関わりの中で孤独や嫉妬、悲しみなどの感情と戦いながら「友だち」の本当の意味を探す不器用な8人の主人公を集めた物語であった。バラバラな主人公を最終章に導くのは、交通事故でクラスの誰とも必要以上に関わらなくなった恵美と腎臓病を患う由香の2人である。全く異なる性格をした彼女たちだが、言葉にしなくても「友だち」の意味を理解している場面を読んで、私も自分にとっての「友だち」の意味を探そうと思った。

8人の主人公が出てくるが、その中の1人である恵美に特に興味をもった。彼女と自分の考えが重なる部分がいくつかあったからだろうか。「みんな」という集団が面倒くさいと思うことや言葉をオブラートに包んで話すことが苦手で誤解されやすいところ、相手のために言ったつもりでも言葉足らずで冷たい人だと思われてしまうところなどが似ていると思った。しかし彼女の強さは私には無く大きく異なる部分だ。恵美のように、みんながやっていることでも友だちの気持ちを考えて流されず断ることができるだろうか、ずっと一緒にいた大切な友だちが亡くなった瞬間に、「悲しみは湧いてこない。」と言えるだろうか。私は

きつと言うことができない。私はみんなが面倒くさいと思うことがあるが、みんなから敵にされることはさらに面倒くさいと思ってしまう。そのため1人で抵抗し続けることはせず、みんなに流されてしまうかもしれない。また、友だちが亡くなってしまったら絶対に悲しんでしまう。涙があふれてしばらく悲しみ続けるはずだ。

恵美が、「悲しみは湧いてこない。」と言えたのは友だちと過ごす時間を大切にしつつも依存しあう関係ではないと考えていたからだと思う。由香の病気が進行して学校に来られる日が少なくなったときにクラスメイトのハナちゃんに、「由香ちゃんが休んでて、寂しくない？」と聞かれて恵美は、「わたしは、一緒にいなくても寂しくない相手のこと、友だちって思うけど」と答えた。この言葉から恵美は友だちとは依存する関係ではなく、離れているときこそ想う関係であるということをハナちゃんに伝えている。友だちとは自分の気分のいいときのみ関わる関係ではなく、相手が助けを必要としているときに手を貸したり、それぞれが頑張ったことを素直に認めあったりする存在であることが大切なのではないかと考えた。そのため友だちが困ったときに助けを求めてもらえるように、私自身心身ともに強くなれるよう日頃から努力しようと思う。

ところで、この物語で友達をあえて「友だち」と表記しているのはなぜだろうか。気にする必要もないのかもしれないが、私はきっと意味があると思う。物語の中で恵美はこのような言葉を残している。

わたしは「みんな」って嫌いだから。「みんな」が「みんな」でいるうちは、友だちじゃない、絶対に

この言葉から恵美は「みんな」が嫌いであることが分かる。恵美にとっては「みんな」が言ってくることも、「友だち」1人が言ってくるの方がよっぽど信頼できると思っている。友達の「達」は仲間という意味を持っていることから、「みんな」を嫌う恵美からしたら「友達」という表現は気になってしまうのではないか。1つのまとまりとして考えるのではなく、1人の存在を大切にする

恵美の気持ちを尊重して「友だち」となっているのではないかと考えた。このように物語が始まってから終わるまで他の誰にも流されずたった 1 人の友だち由香との時間だけを考えて恵美の意志の強さに憧れを持つ。私の大切にしたい友だちは 1 人ではないが、1 人ひとりの存在を大切にしたい周りに流されず、自分と友だちを大切にしたい。

恵美と由香は 2 人で友情を育んできた。他の人が入る隙もないほどの友情だ。亡くなる直前、いや 2 人が天国で再開してからも「友だち」でい続けるだろう。私はこの物語を読み終えたら自分にとっての「友だち」の意味が見つけれられると思っていた。しかし本を読み終え、たどり着くはずがなかった答えにたどり着いた。「友だち」の意味はすぐに見つけられるものではなく、今までそしてこれからも関わっていく友だちとの時間の中でゆっくりと見つけていくものだということだ。8 人の主人公に負けないほど不器用な私と友だちでいてくれる人に、感謝の気持ちを伝えることを忘れず一緒にいてくれることを当たり前と思わず大切にしていこうと思った。恵美と由香のように「友だち」の意味が分かるようになったとき、私は大きく成長しよりよい人間関係を築くことができると考える。

「友だち」は小さな子どもでも分かる言葉だが、その本当の意味を理解するには多くの時間を必要とする。

審査員特別賞

戦争が終わる日

児童教育学科3年

小野寺彩音

『永遠の0』講談社

百田尚樹著

8月15日の正午、私は町中に響き渡る放送の声で目覚める。放送の内容が聞き取れず、二度寝し、夜ニュースを見てアナウンスの内容を知る。私にとっての「終戦の日」はその程度である。

自分が小学生や中学生の頃は、実際に戦争を体験した方に話を聞いたり、資料館に行ったりと、戦争についてよく学んでいた。そのため、終戦の日や、広島や長崎に原爆が落とされた日に流れる町内アナウンスをよく聞き、「戦争がこの世からなくなりますように」と思いを込めて黙とうをしていた。だが大人になった今、どうだろうか。終戦の日を忘れるほど、戦争に対して興味関心がなくなっている。そんな私にこの本「永遠の0」は、戦争について考えるよい機会を与えてくれた。

「永遠の0」は、特攻で戦死した祖父の生涯に興味を持った主人公たちが、当時同じ部隊に所属していた人たちに話を聞きまわり、その中で祖父がどのような人だったのか、どのような生き方をしていたのかを知るという内容である。

私は、この本を寝る前の短い時間を使って、じっくりと読み進めていこうと思っていたが、本を買った初日に一気に読み終えてしまった。それほどこの本に引きこまれたのである。

主人公たちは様々な人たちから祖父・宮部の話を聞くが、どの人もとても詳しく丁寧に話している。目を閉じれば当時の様子が浮かび上がってくるほどである。特に、ラバウルと宮部と共に戦った元海軍飛行兵曹長・井崎源次郎の話が私の胸にグサリと突き刺さった。井崎は作中で主人公たちに

「ガダルカナルこそ太平洋戦争の縮図だということがわかりました。大本営と日本軍のもっとも愚かな部分が、この島での戦いにすべて現れています。いや、日本という国の最も駄目な部分が出た戦場です。だからこそ、ガダルカナルのことはすべての日本人に知ってもらいたい！」と話している。それほどガダルカナルでは過酷な戦いがあったのである。日本軍はガダルカナルの飛行場奪還のため、敵情視察もろくにせず、900人ほどの部隊をガダルカナル島に送り込んだ。その際アメリカ軍の兵隊は約13000人もいたそうだ。無謀である。なぜ、敵情視察をしっかりと行わなかったのか。なによりも将棋の駒のように兵士の命が軽く扱われていた事実にとても胸が痛くなった。そして、900人の日本軍兵は、アメリカ軍兵に夜襲を仕掛けるが全滅してしまう。この頃の日本陸軍の戦い方の基本は銃剣突撃であり、捨て身で敵陣に乗り込み、銃剣で敵兵を刺し殺して戦うという戦い方だったそうだ。ありえない。なぜそのような作戦が実行されたのか。なぜ日本軍の上層部はこのやり方で勝てると思ったのか。そう思わず叫びたくなるほど、900人も日本軍兵士が一夜にして散ってしまった事実が許せなかった。彼らには父や母、あるいは妻や子どもといった大切な人がいたはずだ。私と同じ普通の人なのにも関わらず、生まれた時代が違うだけで、このような目にあうのはあまりにも理不尽ではないか。こういった戦いが幾度となく繰り返され戦争は8月15日に終結したのだ。

私はこの本を通して、様々な人から戦争の話を知ることが出来た。この本の解説で

「本書の中では、太平洋戦争とはどのような戦争でとはどのような戦争で、どのような経過を辿ったのか。また、この戦争に巻き込まれた我々日本人は、軍人は、国民は、その間に、どのように戦い、どのように生きたのか。国を護るために戦わなくてはならなくなった若者たちの心は、命とは。彼ら若者たちを戦場に送り出したエリート将校たちの心とはといったことを作者はもの見事にわかりやすく物語の中にちりばめている」とあるように、まるで歴史本のように、読者の私たちに戦争の経緯や実態を教えてくれた。戦争の経緯を知るとても大切だが、戦争で犠牲になった人たちには私と同じように、父や母といった大

切な人がおり、その人たちにとってかけがえのない存在であったという実態を知ることが大切であるとの本を読んで感じた。数字や文字だけで戦争を学び、知るのではなく、実際に戦争を体験した、戦争に飲まれて亡くなってしまった人の生き方や心を知ることが、今、戦争を忘れかけてしまっている私たちに必要なのではないだろうか。小学生や中学生の頃は学校の歴史の授業や体験学習などで戦争について考える機会が多くあった。だが、大人になった今そのような機会がほとんどない。そのため、自分からそのような機会を設け、戦争について考えることが、令和の世を生きる私たちに求められていると考える。

私たちが住んでいるこの地で昔戦争があり、大勢の人が亡くなった事実は決して忘れてはいけない。そのためにも、戦争について知り、学ぶ機会を設けることが大切であると考え。来年の終戦の日はしっかりと黙とうと捧げ、テレビやインターネットで毎年行われている戦争のドキュメンタリーや特集に触れ、戦争について考える機会を設けようと思う。

審査員特別賞

「感謝」の気持ちを伝えること

韓国語学科3年

前里莉音

『よけいなひと言を好かれるセリフに変える言いかえ図鑑』サンマーク出版

大野萌子著

私は他人からの褒め言葉に対して、「そんなことはないです」という謙遜のひと言でせつかくの相手の好意を台無しにしていた。

私は他人に褒められることが苦手だ。もちろん褒め言葉をもらうと嬉しいが、それに対する返答にいつも困ってしまう。日本人には謙遜の文化があり、文化の異なる外国人からすると、日本人の会話における“謙遜文化”は少し厄介で面倒なものだと感じるかもしれない。私自身も日本人の謙遜文化について考えたことがあるが、煩わしいものだと思っけていても実際にコミュニケーションをする中ではつい謙遜の習慣が出てしまい、相手との会話の中で過度に自分を下げってしまうことが多々ある。

一方、本書では

「謙遜も度を越えると、せつかくほめてくれた相手の気分を害してイラッとさせたり、気を遣わせてしまうことがあります。」

と、自分に対する相手の評価に対して「そんなことはないですよ」と度を越えた謙遜をすることは、相手の好意を否定し気を悪くさせることだと主張している。実際に他人との会話を振り返ってみると、自分も相手に褒められたときに「そんなことはない」と答えてしまうことが多いと感じた。しかし、自分が相手のことを褒めた際に「そんなことはない」の一言が返ってきたら、次にどう返していいかわからず相手を困らせてしまうのではないかと気づき、今後は褒めてくれた相手

の好意を「そんなことない」と否定するのではなく、筆者が言うように「ありがとう」と言いかえることで、まず感謝の気持ちを伝えようと感じた。

また、本書第9章『他人との距離』の中にも、相手に何かを頼まれた際の気持ちのいい返し方が紹介されている。相手が自分に何かを頼んだときに、「私になんて無理」と突き放してしまうのは相手にとって気持ちの良い返答ではない。相手は自分を信頼して任せたのに、そんなことを言われたら面倒くさがれてしまう。

「せっかく自分を頼って声をかけてくれた人を遠ざけないためには、『私であればやらせてください』と“前向きな返事”をすることが一番です。やる気のある素直な姿勢ほど、相手は好感を持つのです。」

という著者の主張のように、他人の好意は快く受け止めて、前向きに返事をするのは非常に大切なことだと思う。私もアルバイト中に普段やらない業務を任されることがあるが、明らかに実力不足でできそうにない業務以外は、「経験はありませんが、私で良ければやってみます。」と言うようにしている。せっかく相手が自分に頼んでくれたことなので、前向きな返事でやったことのないことに挑戦してみるのは非常に良いことだということを再確認した。これからもこの意識を大切にしていきたい。

さらに、本書の中で筆者は子育ての中でできる言いかえについても述べている。子どもが学校のテストで100点を取ったときに、親が「100点をとってえらいね」とほめる場面は容易に想像できるだろう。しかし筆者は、“100点をとったことがえらい”とほめるのではなく、『結果』ではなく、『本人がやったこと』をほめることが大切だと主張している。結果ではなく、あくまで本人自身の行動や頑張りをほめて、認めてあげることで子どもは伸び伸びと育つことが出来るという。私は、この“ほめ方”は子育てだけではなく、会社における新人教育の際にも言えることだと感じた。良い成績を残した新人社員に対して、先輩社員が結果のみを評価すると、新人社員は「結果を出せなければ評価されない」「良い結

果がなければ存在価値がない」と感じてしまうケースも予想される。大事なのは相手の努力で、実際に取り組んだ良い点をほめること。私も、結果までの過程で自分自身が努力した点を他人に認めてもらえると、次に取り組む他の活動にも意欲的に取り組むことが出来ると感じた。

最後に、筆者が「おわりに」で述べているフレーズについて紹介する。筆者である大野萌子は企業内健康管理室カウンセラーとしての長年の経験を生かした、人間関係改善に必須のコミュニケーション、ストレスマネジメントなどの分野を得意とする講師であり、日本メンタルアップ支援機構の代表理事も務めている。彼女は、「自分のことを大切に」というフレーズを読者に対して投げかけている。筆者によると、私たちは日頃「自分の気持ち」を見ないようにすることで、なんとか折り合いをつけて過ごしているという。自分の気持ちを押さえ込み相手を優先すると、我慢したり耐えることが増え、その結果相手から思うような反応がなかった場合に自分がしてあげたことへの見返りを感じられず、悲しさが怒りに変化する。私たち日本人は生まれつき“謙遜文化”を経験しながら育ち、他人に対して自然と自分の感情を抑え込むようになってきていると感じる。謙遜とはへりくだること、控えめな態度をとることを指す言葉だが、私たち日本人にとっては特に初対面の人に対し謙遜を無視して接することはできず、逆に初対面の相手が謙遜のない人だった場合、嫌悪感や疑いを感じることもよくある。しかし前にも述べたように、過度な謙遜は相手の気分を害する場合があるという筆者の主張も十分に理解できる。私たちが慣れ親しんでいる“謙遜文化”は決して悪いものではないが、他人とのコミュニケーションにおいてもっと慎重に考え、扱うべきテーマであると感じた。私も他人とのコミュニケーションを振り返ると、過度な謙遜をしている場面が思い出される。例えば店での会計の際、レジ袋が必要な時に「すみません」や「申し訳ありませんが」から始め、「レジ袋いただけますか？」と言うことがある。この際の「すみません」あるいは「申し訳ありませんが」は過度な謙遜に含まれるのではないだろうか？他にも「すみませんありがとうございます」という言葉。主に外出した際によく耳にする言葉だが、前の「すみません」は言わなくても「ありがとうございます」だけで十分相手に伝わ

る。過度な謙遜が相手に対して良くない印象を与えることがあるのならば、私たち日本人は自分も相手も気持ちの良いコミュニケーションを成すために“過度な謙遜”に対して真剣に考え直さなければならないと感じる。

本書を読んで、相手の好意を素直に受け止め感謝の気持ちをはっきりと表すこと、“過度な謙遜”はしないことが、相手も自分も気持ちの良いコミュニケーションに繋がるということを学んだ。私も本書に学び、今後の大学生活や私生活、さらに社会人になってからの人生において相手も自分も気持ちの良いコミュニケーションをとるための良い「いい変え」を意識して過ごしたいと思う。謙遜に対する考えも個人差があり定義することは難しいテーマだが、本書をより多くの人を読むことで人々の謙遜意識が少しずつ薄れ、「すみません。申し訳ありません。」と言う謝罪の言葉よりも「ありがとう」の感謝の言葉で溢れた社会になることを望む。

2022 年度図書委員

心理カウンセリング学科	小野寺 敦子
心理学研究科	奈良 雅之
人間福祉学科（生涯福祉研究科）	六波羅 詩朗
子ども学科	山中 智省
児童教育学科	小宮山 郁子
メディア学科	原 克彦
社会情報学科	大枝 近子
地域社会学科（国際交流研究科）	石井 貫太郎
経営学科（経営学研究科）	竹内 進
英米語学科	石原 健
中国語学科（言語文化研究科）	胎中 千鶴
韓国語学科	申 貞恩
日本語・日本語教育学科	金澤 裕之
歯科衛生学科	佐藤 昌史
製菓学科	小田 耕三
ビジネス社会学科	大塚 敬義
新宿図書館館長	石井 貫太郎

2023 年 1 月 20 日発行

編集・発行 目白大学新宿図書館